

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 獣医学専攻集談会

日時：2021年2月19日（金）16:00～18:00
Zoomでの講演会

死体に尋ねる、五億年と一万年

遠藤 秀紀 教授
東京大学総合研究博物館

いつのころから、命を生かしているからだの中身を知りたいと思うようになった。当然、話し相手の死体は、数分前まで呼吸をしたり心臓を動かしたりしていたものたちだ。命あった死体を石ころや瀬戸物と同列には捉えない私だが、放っておくと困ったことに無口なのである。だから、執着心をもって、今日も私は死体に尋ねる。

一方、触知ということばがある。字の通り、触って知る、ということだ。私の仕事はあえていえば、死体相手に、触って知ることである。歴史学者や考古学者が遺跡を掘り古刹を訪ね古文書を解読するように、私は死体に指先で触る。もちろん眼で覗きこむことも少なくないが、多くの場合、発見を知る最初の武器は指だ。運が良ければ、その指が人類が気づいていない事実を初めてつかむ。定量性が手法にまで及んで、生身の人間が発見の場に不在なのが現代科学の常識だが、この学で最初に発見を知るのは、私の五感だ。

実験や分析の手法でけっして再現できない時間軸に、私は比較と総合とで対峙している。触知されるのは「事実」であるとともに、「時間」だ。まずは五億年を触知しよう。アライグマやパンダやキリンやアザラシに登場してもらおうか。ついでに、ヒトも対象として忘れないことにしたい。ざっと五億年が、進化が見渡す時間である。他方、家畜家禽が気になって仕方ない私でもある。家畜の時間は、イヌだけもう少し古いかもしれないが、当座一万年としておこう。一万年の触知の相手は、名も無いインドシナのニワトリだったり、日本人には馴染みのない欧州の古いウシだったりする。五億年の方は自然淘汰の帰結として、からだの無理矢理の適応史を見せてくれる。他方、一万年が見せるのは、人間の動機や欲を映す鏡としてのからだだろうか。

今日は、研究でいうところの、結果をなるべく放置してお喋りしてみたいと思う。学者遠藤がのたまわる苦悩の世界が、できれば若い人々の心に何か火花を散らしてくれたら幸いに思う。そういえば、若者が集う獣医学は、こここのところ真理の探究を忘れてしまったように見える。残念だ。博物学の歴史の希薄なこの国で、獣医学は、畜産学や林学や水産学と並んで Zoology や Botany の肩代わりをしてきたのだが、そんな歴史に意識を深めなかった私たちは、さっさと Natural History を置き忘れ、獣医学のかなりの部分を、市場原理経済かそれを支える実学技術か潔癖症気味のルールへの迎合に委ねたのだろう。真理を追い、生命を論じ、哲学のために闘うよりも、洒落て整頓された安楽の日々を求めたのだろう。資格教育だかカリキュラムだかを見ていると、まさにそれが見える。残念だ。探究無きところに知も学も存在しない。そんなこともちよつと憂鬱な、2021年である。



遠藤 秀紀
(えんどう ひでき)

東京大学総合研究博物館教授。一九六五年東京都生まれ。国立科学博物館研究官、京都大学霊長類研究所教授を経て、二〇〇八年より現職。「遺体科学」を提唱、大量の動物死体を集め、解剖することで進化の歴史を明らかにする。現代社会の死生観、生命観を斬りつつ、いまを生きる。著書に、「哺乳類の進化」、「有袋類学」、「ウシの動物学」、「イヌの動物学」、「動物解剖学」（いずれも東京大学総合研究博物館）。「東大夢教授」（リトルモア）、「人体 失敗の進化史」、「ニワトリ 愛を独り占めにした鳥」（いずれも光文社）、など。

連絡先：獣医外科学教室

秋吉秀保（内線 3207） Email : akiyoshi@vet.osakafu-u.ac.jp